

## Thinking Rugby 2002～2003 復活、飛躍への視点と論点 その3

“Running Handling Game の原点：地上に横たわることを少なくし、「立って」プレーする”

激突・激闘が終わり、勝ち負け、明暗、悲喜交々の情景を見ながら考えました。

立っていることは走るための必須要件であり、HANDLING GAME である要素です。継続の要件でもある「立って」プレーするということが、Running Handling Game = ラグビーの原点であるという重要な視点から、個々のプレーや戦略を点検することが、ラグビーの面白さの原点に迫ることになるのです。現状を反省し、併せて未来を考察することが、ラグビーの普及発展に役立つ今日的課題だと思います。

何よりもまず「地上に横たわる」ことが多いことと、立ち上がる動作の遅いことを反省しなければなりません。これを是正するだけで、展開継続・スピードがレベルアップし、未来への展望が開けるのは間違いありません。ラグビーの普及発展の要件として、(ルールを正しく守って)立って走り回るダイナミックラグビーの面白さを追求することを切望されているのは、それが最高にラグビーをenjoyする方法でもあるからです。

### 第1章 「地上に横たわる」ということの意味

人間が持っている、目の前の物や石を拾い投げたり蹴り飛ばしたい本能が、フットボール誕生の原点ですが、それらは立っていなければできないことです。ボールがあれば投げたり蹴ったり持って走り回り、捕まえにくる相手をかわして走り去ることが楽しい本能的行為として加わります。これは、4本足で歩く動物が、2本足で立つようになったことが人間としての第一歩であり、物(ボール)を使って、決まりを決めて遊ぶ競技の進歩と重なってくるのです。

ラグビーは自由で創造的なスポーツとして普及発展してきましたが、基本的に立ってするスポーツということが基盤にあるのです。地上に横たわっているプレーヤーは、競技に参加していると見做されない(off the side)のです。地上に横たわるということは、人間の本能に反し、発展的意欲に逆行するものです。競技中の防御活動の進歩により、タックルが成立し地上に横たわる場合が数多くなりましたが、ボールをすぐ離し、タックラーもタックルされたプレーヤーも、すぐに立ち上がる意志と行為は競技を進める上で大変重要なことです。

### 第2章 地上に横たわる、俗に言う「寝て」プレーはしてはいけないという大原則

地上に横たわるプレーヤーは、競技に参加していない人ですから、当然のこととしてプレーすることは認められません。それだけでなくそのこと自体がゲームの停滞や切断の原因となり、ゲームの展開継続を侵し、スピードを低下させることになり、時には事故の原因にもなります。寝ることは少ない程良いことなのです。

地上に横たわっているプレーヤーはプレーしてはいけないという大原則を破って、地上に横たわっているプレーヤーが、ボールを動かしてもよいというルールの大改革が一昨年なされました。この第15条6-dは、ゲーム継続展開を図るためになされた大英断であることはいまでもありません。

### 第3章 地上に横たわることを少なくするために必要な意識と努力

プレーヤーが地上に横たわる場面が非常に多く、少なくする努力が十分なされていないのが現実です。ボールを持ったプレーヤーは、ボールをより確実に確保するために、即ちチームに貢献しようと、倒れた場合に有利にするための細工が先行しています。結果として、横たわることの減少改善はなかなか望めないところです。ラグビーは普及発展の過程で、地上に横たわることを少なくするルールを設けて工夫を重ねてきている事を学ばねばなりません。タックルは相手を倒すことと理解されていますが、立ってボールを扱う競技ですから、当然立ったままでタックルが成立するのです。モールは地上に倒れることの回避法の一つですし、モールだけでなく、スクラムもラックも崩す行為は認められません。タックルされる場合も、ボールが継続するようにその瞬間における breaking a tackle についての研究が進められ実践されてきました。最近のモールに関するルールの改正は、立ったままのプレーをより奨励しようとするものです。さらに、ラックやモールは、「前進が失敗したプレー」であり、もう一度展開しなさいという意味合いもあるのです。

#### 第4章 地上に横たわる機会とその過程をルールをもとに再検証

第15条検証を材料に検証し、プレー改善に役立てる必要があると思います。尚、次の項目についてルールの理解と行為のイメージをすりあわせる必要があると思いますので掲げておきます。

- (1) ボールを持って走っていて転ける場合  
けつまずいたり、滑ったりしてバランスを失い、転げることがあります。相手の手が引っ掛かっている関係ありません。全く問題ないのに即よいプレーに繋がらない場合があります。間延びしたプレーになっています。
- (2) ボールの上にかぶさるようにして身体の下にボールを確保すること  
地上に横たわっているのと同様で、頑張るはいけません。意図的であればそれは悪質というべきです。反則です。
- (3) arriving player がボールを越えて倒れる  
ラックに到達したプレーヤーがラックに入る場合、勢い余ってボールを越えて前に出てしまった場合、相手のプレーを邪魔してはいけません。ボールの向こうへ倒れるのも相手のプレーを邪魔し、展開を妨げる行為です。
- (4) falling on the ball して  
saving =セービング(救う)というのはプレーではなく、救うという目的を総称した言葉です。オープンプレーにおいて地上に転がっているボールを処理する場合、まずボールを止めて支配下におくことが先決問題です。それが相手の前進を止めることにもなりますので、save 救うという言葉が使われました。  
それは必要有効なプレーですが、危険防止のためすぐ立ち上がることが必須条件です。ボールを止めることが可能ならば、腰を下ろすだけで、地上に横たわらなくてもよいのです。その方がスムーズに攻撃が連続できます。

#### 第5章 課題解決のための基礎的事項

- (1) 第15条6項(a)はタックルされたプレーヤー全体に係わる重要なものです。  
タックルされたプレーヤーは、プレー継続のため、直ちにボールをプレーできるようにしなければならない。プレー「継続」のため、直ちに「ボールをプレーできる」ようにしなければならないのです。どのようにしなさいという前に、何としても継続するという事です。(b)項以下がmust, may, canで書かれているのに対して(a)項はmust try to make ... と努力項目として全体を一括しているのです。このルールの意図を認識することが極めて肝要なのです。(a)項を熟知体得すること無しにいろいろと小細工するものですから間違った方向へ行ってしまいます。
- (2) ボールを放す、離れる、立つ  
地上に横たわるプレーヤーは、ボールを放す、ボールから離れる、立つという3つのことが要求されているのです。捕まえた相手を放すのは当然のことですし、それらの行為を妨げることは許されないのです。
- (3) 直ちに  
立ってプレーすることが、running handling game の基本的基盤です。  
直ちという場合、at onceと immediatelyが使われています。それは、単に時間の長さではなく、ゲームの流れのなかで許容されるものです。許容範囲を超えてはいけません。ルールの意志を生かすプレーを心がけねばなりません。
- (4) ハンドラック  
タックルされたら、うまくボディコントロールしてボールを抱えて地上に倒れることが、ボールを確実に所有するために有利な場合もあります。しかし、必ずしも地上に横たわる必要はなく、(相手に捕まり双方のサポーターが組み合った状態でボールを地上に落とす、置く)ハンドラックを形成すれば、モールと違った有効性もあるのです。そのようにして立った状態から、立って走り回るダイナミックラグビーを心がければ、ラグビーの面白さもずっと大きくなるのです。

## まとめ

立っていないと走れないのですから、運動量を多くするために立っていることが必須要件であり、地上に横たわる機会を少なくすることが解決の条件になります。地上に横たわることがラグビーの一部とする概念を捨てて発想を転換することによって、ラグビーが面白くなります。ラグビーはもっともっと面白い競技なのです。勝つ為にスピーディであることの大切なことはよく理解されていますが、立ってプレーすることを研究実践することは、勝つための有効な手段の一つなのです。

2003.03.22

西川 義行